

看護学生のアドボケイトとしての役割意識を高める試み ～名刺を活用して～

諏訪赤十字看護専門学校

登内秀子

Trial of raising student nurses' consciousness of roles as advocates

— To make use of cards —

Hideko TONOUCHI

Japanese Red Cross Suwa Nursing School

Key Words : 看護学生、アドボケイト、名刺

はじめに

現在、看護基礎教育において専門職としての倫理教育は重要な位置を占めている。看護学生は講義の中で職業倫理を学ぶが、知識を得たからと言ってすぐ行動化できるものではなく、臨床の場での多様な体験を通して身についていくものである。

しかし、看護学生は学生という立場であっても、臨床実習の場では看護者の一員であり、患者の権利擁護者（以下アドボケイトとする）として行動することを求められる。そのため倫理的に判断し行動することが未熟な看護学生は実習中いろいろな場面で戸惑い、時には自己の行動が意図せず患者の権利を侵害してしまったことに、傷つくこともある。

そこで、看護学生が実習の場でアドボケイトとしての役割を意識し具体的な行動ができることを目的に、実習前に「患者に渡すための名刺」を作成し、実習に臨むという試みをした。

今回、名刺の活用により実習中の看護学生のアドボケイトとしての役割意識や行動に変化があったかを、学生の自由記載を通して考察したので、その結果を報告する。

目 的

名刺活用が、看護学生の実習におけるアドボケイトとしての役割意識や行動に、どのように影響したかを考察する。

方 法

対象：看護専門学校 2年生 41名

期間：領域別看護学実習開始時 2月～3月

展開：① 実習前、医療安全の授業として、「患者の権利とは」「患者の権利擁護者としての看護師の役割」「実習における倫理的行動の必要性」について講義を行った。その後、看護学生の立場で、患者の権利を擁護するために何ができるのか、どのように行動することが必要か考えさせた。その上で、そのことを意識して行動できるようにするためと、患者にも理解してもらうために、自己紹介に用いる名刺を作成させた。本来の名刺は小型のカードだが、作成しやすくするためにA4サイズの用紙を使用した。名刺には、氏名、所属、学年、学生の立場で患者の権利を守るために自分は何ができる存在なのかが分かるように書き、縦型、横型は問わず、絵やデザインは自由とした。（図1、2）

② 実習場面では、病棟との調整の難しさから今回は実際に患者には渡さず、自分の手元に置き実習することにした。患者に渡さない代わりとして、担当教員と実習グループメンバーとで共有し、お互いに意識し合うように働きかけた。

③ 実習終了後、名刺を作成して実習に臨んだことにより、実習中の意識や行動に変化があったか、自由記載してもらい、意味の類似

性においてカテゴリー化し考察した。

結 果

名刺を作成して実習に臨んだことによる実習中の意識、行動の変化について自由記載したものは、以下の6つのカテゴリーに分類できた。

1. 患者に合ったより良い援助

援助を行う際、「患者に合った援助とは」「患者の快に繋がる援助とは」と、患者により良い援助を提供しようと考え、援助を行った。

2. 個人情報保護の意識の高まり

これまで以上に「個人情報となるものは何か」と吟味する意識が高まり、また個人情報を意識的に「慎重に取り扱う」行動ができた。

3. 自己の明確化

患者への援助について、この事は「今の自分にできることなのか」「できないことなのか」をいつも明確にしてから行動した。また、自分にできると分ったことは、今までより積極的に行動できた。

4. 看護師との関わりの変化

学生である自分が援助を行う時は、患者の安全を守るためには看護師の支援が必要であることを意識し、今までより積極的に看護師と関わりを持ち、報告、連絡、相談、確認を行った。

5. 患者への対応の変化

自分の言動が患者に影響することを意識し、患者を尊重する態度として自己紹介や挨拶を丁寧に行った。また、患者と積極的に関わり、患者との信頼関係を作

れるように行動した。

6. 実習への取り組み方

責任を持って看護するために、曖昧なことをそのままにせず、事前学習や援助前の準備をきちんと行うようにした。

考 察

カテゴリー1、2、3から、看護学生は名刺を作成するために、各々が自分のどんな言動が「患者権利の擁護となる」のか、「侵害となる」のかを具体的に考えたと思われる。講義やオリエンテーションを聞いただけにとどめず、「名刺を作成する」ために具体的な行動をイメージする作業を行ったことが、自己の行動に対する意識を高め、行動の変化を導いたと考える。

そしてこれらは、自己理解、自己受容を促進し、自己の力を発揮しながらアドボケイトとして行動していく力に繋がったと考える。

カテゴリー4、5、6からは、名刺に書き表し、教員やグループメンバーに表明したことで、「実行する責任」を自覚し、行動化が強まったと考えられる。また、実習中その時々状況の中で、立ち止まって自己の力を吟味し、看護師の支援を適切に受ける行動へと促した。このような行動が患者への安全、安楽な援助の実践となり、アドボケイトとしての行動に繋がったと考える。

名刺とは、小形の紙に姓名、住所、職業、身分など印刷したもので、訪問、面会その他、人に接する場合、自己紹介に用いる¹⁾ものである。さらに、名刺は手

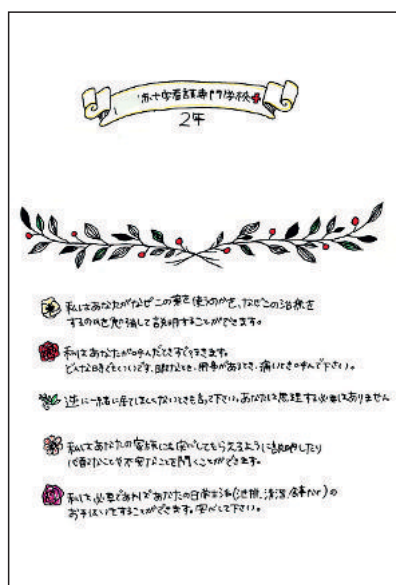


図1 学生が作成した名刺1

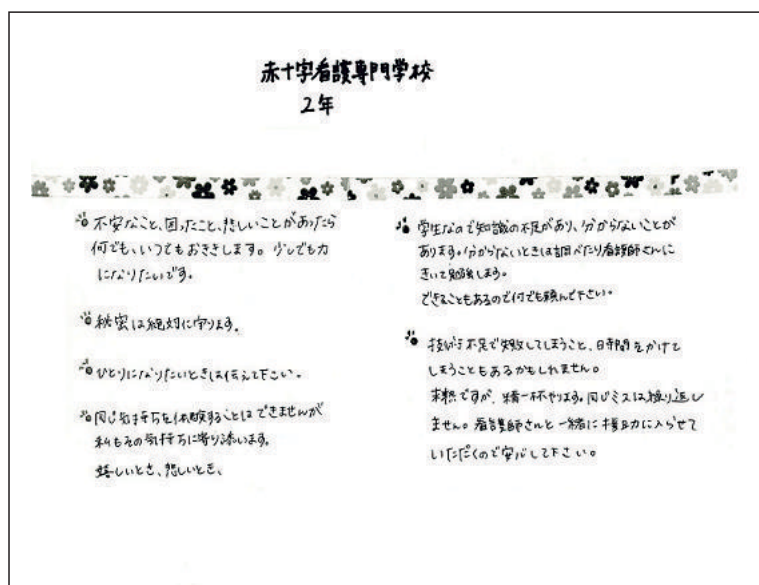


図2 学生が作成した名刺2

渡すことで相手の元に残るため、個人を覚えてもらうことにもなる。ビジネスの場では当たり前により取りされ、名刺を提示されることにより、相手がどのような仕事のどのような役割や責任を担っているのかを知り、関係を作っていくことに役立っていると考ええる。

患者の権利宣言案、四（知る権利）の5には、「患者は、主治医ならびに診療に関与する医療従事者の氏名・資格・役割を知る権利を有します。」²⁾とあり、医療従事者について知ることは、患者が安心して医療を受けるための権利と言える。一方、医療従事者は、患者の知る権利を擁護するためにそれらを患者に知らせる必要があり、表明することは医療従事者にとって自身の役割、責任の所在を明確に認識できると同時に、患者に理解してもらうことによって支援しやすい環境を作ることにもなると考える。

今回看護学生に、患者のアドボケイトとしての自分を自己紹介する名刺を作成させ、それを意識しながら実習に臨むという試みを行った。本来ならば患者に手渡すための名刺ではあるが、作成そのものが、アドボケイトとしての看護学生の意識を高め、行動指針となった事がわかった。

また、振り返り後に自分の名刺を見返し、追加や書き直しをした看護学生もいた。振り返りをさせることで自己の意識的な行動がアドボケイトとして重要であったことをあらためて認識できたと共に、グループメンバーからのフィードバックによって新たに発見できたこともあった。名刺の作成のみならず、このような振り返りをすることが、看護学生の自己理解、自己受容を促進し、「患者のアドボケイトとしてのプロ」である看護師としての力を身につけていくことに繋がると考える。

おわりに

「名刺活用の試み」は、看護学生のアドボケイトとしての役割意識を高めることが分った。しかし、看護学生が本当に身につけるためには、繰り返し、継続的な働きかけが必要である。「患者のアドボケイトとしてのプロ」である看護師を目指し、引き続き看護学生の倫理観が育つ教育を実践していきたい。そのためにも、名刺を患者に渡すことも検討し、今回の取り組みを継続していきたいと考える。

引用文献

- 1) 新村 出：広辞苑 第三版 岩波書店 1989, p.2345
- 2) 患者の権利宣言全国起草委員会 患者の権利宣言案 (1984年10月14日)
<http://www.iryu-bengo.com/general/pdf/declaration.pdf>

参考文献

- 1) 隈本邦彦：ナースが学ぶ「患者の権利」講座 アドボケイトとなるための25の心得 日本 看護協会出版会 2007, p.4
- 2) 小西恵美子, 八尋道子, 他：看護学テキスト NiCE 看護倫理 よい看護・よい看護師への道しるべ 南江堂 2011
- 3) 松葉祥一, 石原逸子, 他：系統看護学講座 別巻 看護倫理 医学書院 2017
- 4) 下司映一, 菅原スミ, 他：看護学生してはいけないケースファイル臨地実習禁忌集 丸善出版 2014